



但州当石 社中

すみまきく世をなけりし鳥下り 瑠谷

松乃門はゆくもたてし一も鶴ふ

ひくくやあうへえ遊ふ子を案し

飲をのまそ麻酒けちや神なき

夕虹や小松う下枝維乃夢 竹宇

似多なきをかくすむの扇ふ

名月やふすませハ親乃顔

雨加水に相了も障れと川氷



夢まきえてやくて落来はひとりか  
五竹  
精進の志くもすくけり男々れ  
なうふおやねもふるりふ水の音  
こころや酒の遣よむ丹波こえ

をらるるハ芝生をのわは雲雀の  
蘭溪  
燕子を控く寝ふよ老う足  
衣う法門や灰汁桶鶺鴒冠花  
いと細し時雨のたぐは笛の夢

こころれも同一夢なは蟬ふ  
夕鳥やあやしめれぬる白の音  
そつ秋やあさねする人起る人  
とりくすものや小春の梅さく

何となく風をかようかおほる月  
臨川  
帷帳の中よそかして螢二おゆ  
秋茹子初生かそにかそへう葉  
とつゆふやせハ折くくの二葉麦



くさのすけ口終り尻梅もろが 居雲

ふ雪やちうくと遠を隣あり

ひくくーのあさきたつて合歡花 葛瓶

荊口はあのをたまりー本賊ふ

管ちうぬ船もり又ゆきけ雪 須太

一ふーあさあけ書の田植う

苜株ふ蚕つくみてあはれあり

とあふんとてさのけり落葉ふ

あふふすけ人ああろー園乃梅 有橋

山松や栗のけふ終らまき

勢呼や醜賣のあはれをい

志くれんと先川巻乃耐ふり

番匠乃砥水はあれる梨子のを 東季

物乃ろろ繩におほゆはもれあり

あはれそふ虫はあはれぬあ

き菊にふききあきも抱たは



磯貝のかさくあやま乃暮 霞夫  
黄昏を狼告ぬをくはく  
磯なぐて都の秋城歩きより  
くはかふものよ火桶乃捨るる

やろ急くそ葉こくくりまの山 乙 総  
葉もそや末に成りり凡の歌  
麦洗ふくを時く川ゆはるは  
片墨や志くれて為る標乃実

石川や築竹青く白く 支 酴  
い川さよなぐくあはものそ粟花  
たすめハイかとのきぬさ  
髪ゆふてあうくあはを新あま

夕風や細引乃申新さく細 如 凡  
なう川眺を  
内やまき一板三里乃精烟川  
日宮巾や紫くむ葛新を  
片つと入は敵の使乃改巾



磬こゝりおり脊戸の掩月 以言  
 ゆるほの盛き秋の花あめ  
 糸乃 暁きききききききき  
 こゝろや山鳴るかと吹もせ  
 雨の存あるにきあは梅や 北平  
 風吹ハ掩くと花か梅  
 宵たあきよるる廣野のふの月  
 山山はくわん入るのあててそりて  
炭多きものなり 炭竈やあきききききききき

風落て凡中引あとの三日の月 成三  
 何乃本のみかふともかく恙無山  
 午の貝吹やむあは梅猶在  
 雪つて息つく火光の神あきき  
 壳ハ花よき日く乃あききき 木北  
 男乙女や一及るりきききき  
 人闕て梅沢をつる扱きき  
 志乃まきの岩よききききき 枯竹あき



對客

下四

君見よや藪をたかゆ梅枝月 長炊

さみられや蛙の音も踏く一む

硯より外にもらふも芋乃高

神書に松をぬ葉のたす急か

とくもあゝかまよ屋者後れを 邦馬

い川にあれとつけてる扱の火とら虫

ふ葉の高あゝい新く 朝日か

一月もことゝいましく紙衣隠し

葉がもてに搦てえいふ接か 素木

ふ西乃をれいかもかー宵の園

み葉してよのりもあゝぬ夕日か

をっーさのあまりけわいし新たふ

向ざり山こなふしも 帰 居 太希

照ーあふまめかゝるやり堂

川流や水の中よて菱柙

いそやまの砂こちまろふ菱柙



くさのすや篠のまきくの藪つは 指虹  
川涼し加茂忌崎乃夕烟  
利豫の手にけりさのしな冬虫か  
志くもや甲干亀の水み入

たもてとる花を針さすつえき少 芝秀  
油屋と辨治は隣る星々のか  
蟻の圃に核のふまかきさり  
降ぬ日も深宵をいてきま俳

耕やすまのの水乃けめらば 少年 若奥

鶯さよさりとてきま産れはれ  
ちくくくと川系ねもてとね柵  
雪あがり隙子乃外に小鳥啼

取とすはえ溜てええぬ田うか 同 隼石  
後人の芽の端を之度うさり  
いかにしてまゆ一葉つな涼果か  
埋れてかしく折れを雪の竹



七草をかのかととやー初またり  
 亜年  
 雨晴や橋乃春新あまのり  
 かりあまの月ま新あまのり  
 炭竈やまのまよえんは夕煙  
 米進  
 麦秋やなうぬまのたおま  
 雅什  
 ーくれまや沖より言波の音  
 如恒  
 春の夕もぬまの曇の那  
 馬東  
 よーきー八月とあまの花乃下  
 百圍  
 うーにけま一八笑ぬ小庭ま

ねとあうまのまなく鞠うま  
 萬和  
 涼ーまや芝生けして雨乃御  
 草刈とまひうりま茶  
 黍乃売まーまの面ま

潮時の馬嘶なり春の雨  
 撫琴  
 弁琴をなくせハ風乃意ま  
 こゆれてまなうくまのま乃秋  
 鐘乃夢寺よて遠ーまもま



夢の女しるしを若布小 言葛

七月乃いづれも累時横日うか

風強くたえまみくは花蓋 原人

煙の煙うさなれ雲はみき

。

おもひまや嘘まなこー 蛙乃子 稻秀

歌代やたつき流ー

光を肩て月えよりん文科へ

夜神亦や水は答ふ笛乃夢

来一時の夢より細一帰る いへ

けいこのあつれてあはれ 垣牛

あはれさよゆけをりかと嘘 子伝

ふ牡丹みめよま月乃がまじ

春乃月や暇簾まじつれ人の歌 夢い

綿もぬたむさきー 更衣

志未始る夢まじーあま  
うかつけね人しそまらさま

さるくときちうり京の海へ はと

志未始る夢まじーあま



下地

蝶とまればもさうむき乃新 少年 芳松

ふゆねとよ拍よあめらぢり

あそしる風流よ新乃涼うか、雪轍

いけとあく汐のき入碇清水、唯吉

ふねくもさひつけは田唄は、佐吉

○ 粟津寺仲寺まで

よーや君祿余とくもすき系 老人 可乙

まろく屋原してぬきや紙ひか 秋 閑窓

あはれとさよの機乃ゆふ屋下 指的

あすさくハ寂しきものをかんとり

かきまはにうらふる宵の面やさめ 千之

日もあつて善す菴もそねの秋

来るハ来るかふるハ見えは火取虫 社中油 雅南

まよれと茨くろな乾虫おる

千尋の岡えよ来たかんとり 守得

なうくよ水きえしらぬ雨少



はななくふよ牛蒡せるとも花の下 巨川  
わけやすきみ月あうも 夜此雨  
摘はも忘れてもとれははくし 惟川  
ゆふかや月も凋むもれあうり  
をのうありのあうりてよろふ 勢水  
扱もすくくかうくくと様うか 百方  
筆考の沈めいあつむ一 流うひ  
様くあもさくく乃蓋うか 此主  
用や中々せぬよあを並けよる

呼吸して呼吸やびまてハ嘘の家 逸良  
初葉瓜夕ろろけくいとむん  
かともはけけろ呼吸のも今のうち  
少年  
勘太郎

皆餅を成つていろやまのま 木卯  
名月やう青不光の葉えんむ 翠樹  
落桂なうはふくを誰う兒そ 鬣風  
日の落てまの掠るう鷗乃智 季友  
後ろも花のうささろわし山 志一



伊福社中 求我

懐きよて聖ハ来よろこ

之日月の入れハ照村の智山

牛馬も十市 乃里や秋の昏

入まに波のうねくういほ

石赤れて年くくれ山極

暮のまをくくたうりて眺

雨を乃付しそたのあひる

くく鴨乃一おおくれ夕

やづきや躰のけんもあは

伊福社中

求我

、

、

、

多美

、

五峯

、

壺友

ひくくくと我とまのり

唐のやまをまの懐

炭燗照日んくもは

折ゆーを滝穂の輪

牽牛花よりくく

みさび江乃あま

。

赤影の陰は虫なく月お

言川の底にまつけを柳

白兔

如澗

樗山

赤石

其山

、

天香

屠龍

少年 千也



流るより流水一が舟の音 春枝

上石社中

夕嵐あうぬものふきに 破る世哉 水生秋 新之

は日け山を 櫻乃やあうつら 牛斐 五梅

鹿啼て 柳もなぬ事を 思ひたり

木推り 霧のいませ 山ささる さの 屏

川尻や ござりまふ 雲乃 點 さの 玲橋

初雪をかふーと 雪や 秋の麻

山を 梢もあうー 後の月 梅 苔岬

黄あふと 多き中も 夢を 府文

小舟さーていさる 舟りん 網代也

菱花さうさう 中を 夢を 上石 石雅

経おも 夢を 夢い まい 有ぬし

夕ぐれ 秋さく あるを 扱ゆ 雨

茶裁のともさる 木あう 雨の月

○ 西下 中溪 秋 長和 長和



松乃葉のふけいのち秋蟬の夢

日秋

種月

まりあきよ鹿壇のこめに波打る

みこむい石ももきくはけしきか

亜青

もつ秋や美まぬ桐のまはきさ

戸なきしそ燕かつぬ夕まき

自来

ひくくしや葉まきほり時もよ

入梅をれてくふんもふる蓮のこ

少年

螢夕

きりくすきまわりの形か

秋されいももふる虫も鳴

昨非

あきもいおわたりてねつる梅か

芝

循和

去冬の葉もともん糖と桐の花

伏屋足えしきさのむしの小お石

おらうとを答へて

口切やまふくともふおむりし

糸蕨乃垣の外よりかきしら

訶竹

名月や霄きおきぬひう山

世村

流水

あきつき終るまにあつて秋の昏

なうくは松の葉まきむ付面か



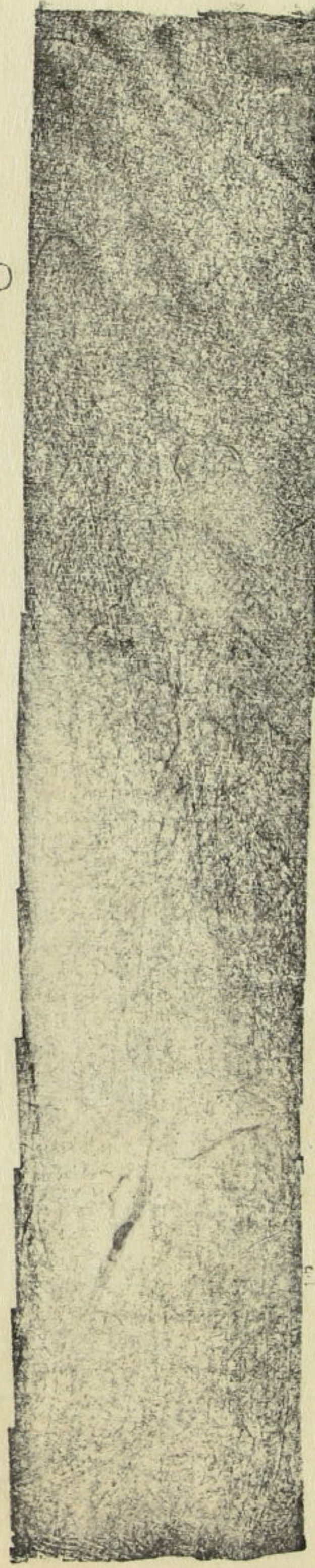




○ 香山を松子夕音 鈴の音 羨 妙見山 驅鳥

風なくして子布ひあ 夕音 山 樗 樗 日 樗 樗

炭竈の煙をふー人黒ー



○ 若水や主水司 乃ハミ米 生野浪山 希月

閑さな巨旌のあかり花こそよ 日 素由

精細川おあけて流るる

蕎麦の花かぬけて秋の夕小

うまうそ新麻の巻ふー初附取

梅にふー柳よ白ー春の風 日 五丸

何骨よ抗一本の目教小

小お取けさき媚もふりり

餅菴や夕うれうけて鈴の音



再加

蛙啼くれや管籥乃のいひも 日 寒秀

くくのすや六月山の鳴子も

秋立のくらくんまふよあふま 女 多る

銀屏の蕨を忘れし扱きも

菴つくりて かきりんと扱ふに

幾里の志くれ松笠そめて来よ 松主人

松主人の汗といつる ことまありて

あもあゝぬきまいさうるれ神くれ 一音

但州 廣谷

蟻こよふおけりくもひり 山 桃如

菱川や水ふぶくへのおちろく

あゝや喜み乾ねくみほけ松

より 雪乃馬

○

立脇

苗代やか あふれ 渡江

とり あふれ

あゝ あふれ

こゝ あふれ



初や一おの文とおもてねた 化蝶  
あゝとゆやまうり新奥の糸も倦  
たのよふねとやうくはむまりのま 女 双危

何夢て善新あうりの市女並 涼秀  
かゝるおじと竿まのまゝく周旋も  
おれ切れるもねとをきぬ 芒草  
ふ書やひるうつら海まのうま

山をやらさうしげく時暮乃風 女 茶章  
くはーさう春戸の流の菱叶  
おとくそまもつらぬ虫標ひ  
西りよ付まーま 枯柳

牛の角よりたつる柳くも 文 綱  
散るもあさうりまを蘇のけ夕  
まゝるや草は枯葉のなれり 麻人  
か秋やまのうまけしう萩の風







かろすこのふつうやまをさうし  
其乃爰さあてりあや 花梅 後放 其 蹊  
茶の花やいろくのなをまよあつま、如 阜

○  
せし梅折れを通すのふとあまり 但州竹田 寸 樓  
つあくすもたらありぬを藤の夢

曉の釜乃湯きあれん子 鏡、玉泉  
あさく知のまゝ船とらふ日陰は、和石  
固まを病て空おそるゝを暑系、蘭友  
芍薬ハ廿日たうりの蒼、のれ、和石

ねもふかとりをゆるめも以干し 浪山 兔 丈

○  
揺ちるや色をを竹麻の下あせを 播州三眺菴社中 野 上  
林田

雲子向くかこまりくを秋乃昏、  
あまをを茶より瘠てや〜をも 猿 年  
夕風やを吹い内々幕乃下 李 雨  
各茶屋や簾こ〜よえゆる杜若、  
倉うてて蒼も梅乃白い外 五 角  
とまいてをさうくとせ〜秋の面、



多しうて志のよき蟹乃ゆきすも  
 争に争あさき尚おまひう  
 草急のなかりとれて虫おま  
 うひすや小毎よこかすきうの玉  
 かまつはんに麦糠あうん惜さか  
 虫蝶のうれをふもは翅のあ  
 月代や美葛うはくの風白  
 子苗とる園き夕日の白ひか  
 え徳ぬをよより書る花の山  
 画佛 唯也 晋山 雨人 青牛 麴呂 桂舟

空湯や世上に掛よ菊乃妙法  
 月急のあさきを洞よ田うさ  
 美水やひくくあかの落みとり  
 山茶急や花あさうん人き  
 西須戸や細きあうりよ三日の月  
 難いさよかきけあさよ親二人  
 多しうて志のよき蟹乃ゆきすも  
 争に争あさき尚おまひう  
 草急のなかりとれて虫おま  
 うひすや小毎よこかすきうの玉  
 かまつはんに麦糠あうん惜さか  
 虫蝶のうれをふもは翅のあ  
 月代や美葛うはくの風白  
 子苗とる園き夕日の白ひか  
 え徳ぬをよより書る花の山  
 画佛 唯也 晋山 雨人 青牛 麴呂 桂舟

化州寺井  
 少年  
 梅  
 馬肝  
 白画  
 花刀  
 花計  
 幽香



鳥啼や人静りて月を三 新町 五草

あさやうに木槿花さく且のれ

雨降ぬさす戸をまてあひあひ 其地 紫蘿

寐ころいそ後よ虫子や文衣 以文

箕形来て針突にうけし給 如水

松乃葉あよをけしや 非陰 月る 茂喬

曉やまのつら 雨光

くさひすや嵐の中 梨青

名月の夢を捨ふ 縮 雀

松うさを懐よ 承年

市中哉 可松

田乃方へ 花瓦

啼くも枝 蛙 廣峯

○

親も有るも か吉川 宗保

累まき日 捨菴

夕暮に 蛙

柴の戸 松の音



船て夏禱の低きよ臙月 嶺南  
 汐風子梅も皆や松乃中 淇菌  
 名月や芦の花ちる水の上 青角  
 外堀や紅葉落る萩乃上 五畜  
 鶯啼てあまきさき秋のき 小松 白菊  
 ちくま子登て酒のむさく 大木 寫竹  
 名跡うや朽く声すまの居 五齡  
 秋のき名に憂のそよろ さか  
 弓箒持人あも登て山さく さか 蝸國

夫六子あきせほくや佛生舎 さか 布舟  
 いねのそ家八幡糸乃天をうね  
 〇  
 ういすの声も歩入柳う家 大和 芋菌  
 ちまなうにあまきあけは螢小  
 杭本く果き下るよ 蛭牛 八百樹  
 ふも赤も子日紅の終 さか  
 一喜ぬーとと御山と素内す  
 ちま捨糸たき井寺かんこり 何来  
 藻のよや鳩の浮巢の松りと



くわと能は汲ねとまさぬ清水家 双末  
とちかかゝ渡るぬえさ〜天の川、  
虫乃香の掛いぬらハあゝ暑〜  
自天  
世山おろ京に初〜く世を少、都工  
つれくと目さ〜志悔〜あ自る、言流  
むすよふにまぬのあひく清水家、柝船

音阿きとむ

やとんま〜嵐のたもま〜ところ、寫樂  
小淵市のた〜られ〜り合歡花、

く〜いそん壇ぬ柳の志〜  
道立  
ちよろ〜とせ〜らま〜る水鏡  
あ〜ふれともなくを何とて秋の夜  
冬〜も正清子何をかまつ〜

ワレ世とり終日ま世涅槃像 日南雅  
言灯籠と〜おと〜ありぬ雨の中、  
宇治に居てたもよや源流のまの水 自笑  
於東や上荷をおろす塩 俵、



掩くふ梅こもり見ゆるうれ  
日 春面  
 多葉や高むつうしと冬に咲  
 まんまのまばらも春の夕  
 夜をまごころあるん建子よ  
 集馬

風おしくおもくは花のこころ  
日 羨角  
 つくくとり燈る夜や春の夢  
 定雅  
 る志けくこの心なきは垣根  
 計酔  
 のとさや抱てんる赤花表  
 江涯

浅き海に舟やまふは咲ぬ垣あ  
京 百池  
 蓮乃香やまより秋へなより水  
 いあつみやゆきまはるは鬼門隅  
 こがしーや川にまはるはさくら枝  
 月漢

花はも更とひあう花ゆふ原  
 佛檀に雨乃漏ねやかとる  
 とくくと雲細るやと秋  
 妻とまき雪んかす日南也



秋あけと哀もやえむ梅の花 我則  
るる月を憐みよ—雲乃も  
二りらんけけてささう—やうど  
こく—や光初のほるれるる音

○ 音情

赤森えけの音々にまぬやあ 致郷  
る月や偲つ—よ 大乃亭  
一志きり 散ふさり—あきや  
おふかこ 月もふかぬと—ねぬ

忘れてき伏見の梅乃月おど 田福  
たらんふや 梅枝子 棋と弁光二人  
兼古—片山里乃らつれく  
るあを 海き 汲つて 成さるり

○

麦海の大繩にきふく—や 九湖  
七夕や 船森くらふ 京の町 竹裡  
雪お 鑽す 縣めて—く 又ゆるる 万容  
る 熊<sup>ロ</sup>く<sup>ロ</sup>の 家や 光とよみ 嵐甲



○  
月空——さねと都乃ひ——山  
とふらゆる響の先々川心うね  
夕陽日又一つ去きり為夢の家  
帯衣着て風の吹日に歩りり  
雪ふりり里吹あけしお明し  
冬位の窓ささくれぬさきさ  
歩ふれ——夢の途さよ神あふ

浪花

芙蓉花

鳴鳳

霞東

東留

采假

青彦

亀友

○  
船や寄堀江能渡に踏乃夢  
さそ又風おき——ろふ若夢うか  
為船や去る——里とねをいん  
ぬ新る志けと田子の——舟  
何とねく旅人いそく枯夢うか  
け——おやそ夢のる能世持酒  
神多きあははゆりか——まふ

生佛

弄鵝

入江

百非

魯文

五帛

亀友



樓に夜振りやあらる月 楮冠

江に臨む垣徳の蕨や船魚や

君く代や流りしけり 門の花 葛居

猫ひや蝶々もふかき 力あは

○

ふ梅や吹きしきれしや 石漱

噴もひとしを涼し 文衣

階おして虫乃掃をさあや

松より引舟もくして 時あ

ららぬ弘川ちき清て

浪花

中日きあまきき 舟ひらんが 栢舟

松の友塔そろふり 若菜山

賀岡業落成

牛車とて一日に殺百歩も 駿馬の

尾まつくとまハ一鞭しき 百里をた

松子つゝ 葎ハちとせのちみちか

櫻去日世に祝詞法承賀の句ハ親句よ  
他一必五音連聲の續を要とす但此  
つらまなぐとも句のつげく語のかま



まゝと正親句とふとを以て自然に  
三句のつゝまた又小なり首の松なるく連夢  
ありは未を正親句といへば句を以て人  
を富貴ととまけり吉兆といふ一栢舟の  
吉松風子の流なり

船歌やまの木のけし歌喜乃を  
一嵐

かハかまやまめのかと人志しん

と疾いつる月よりさきに木槿花は

芦火焚既子馬乃うけかろ

須十浦の舟人もあはむか人より アキ 風律  
夏の小く奥に庭あり獲 月、青雨  
廻板にかゝこまりきり瓦ニツ、五度  
松風の吹かゝゝ月々青、羽人  
ふくと鹿の脊中や神嵐 サカイ 吳送  
こからゝの泣きりけあふ入日 中 湖嵐  
枕より一寐の風情あり蘇のを 田 李山  
まゝ夢やこちうぬ水に月のさす ヒニコ 古聲  
ゆゝくと小舟海扱乃螢うま 土佐 楚流



藪陰のみや氷に光るいろ 月 井 蘭里  
 とりつきー蝶ともふ花一葉 目 青容  
 於市や芥子の色に眼の覚え 長サキ 枕山  
 破く秋の目きりそせ 大村 亭  
 苔も啼虫も枯れ乃たまひ サツ 錦志  
 月 ナユミ  
 遠かる夜半や鏡 フセン 琉球人  
 うらひそや脊にあく日も ハツ 萬空  
 梅の枝はあ繁かをまう ヒ 代文曉  
 漸くこゝと志らまふ チ 蝶醉

こゝの声ありけの日 日 魯白  
 喜柳や何に花よて目も 日 五明  
 ひよやけやかけろよ サ 島柵  
 水乃上 大  
 虫の夢とれ 不 蝶鼓  
 夢とむる竹も 不  
 三つまや イ 桐雨  
 舟の端乃 イ  
 仙を イ  
 浮流 イ  
 舟送舟 イ  
 形か イ  
 花 イ 花雪  
 少い イ 君里



鶴鶴の地をくらふ枯ゆりな 成中 康二  
たよくとおとて水のぬき 山 里秋

未来心身不可得

望き又望乃すうや雲のみ 吉列 白露  
よもそく啼て鐘の灰蛙の目 白松 芦水  
初雪やまほいなるものハ 朝馬 瓢  
り秋や圓乃一解これ 京 子鳳  
鳴さやあつらぬ落月夜、箕山  
漏るのやつハつ 多摩 百尾

物囃ふ金にむち 大伴 冬柱  
一二夜福んいれてきく水 鯉 遊

簞虫ハ 藤舎 重厚  
鳴 京 蝶夢  
三人と玄 玄 簞るさむ 玄

夜浴ハ天乃 伏水 鳳五  
かゝらんや 酒 濁るまん  
有えて月 丸 田井乃水、丸秋



梅の花よく咲つるよ又たまよ 雨谷  
たもよる人並あきて暮去る家  
花は旅に人ハ勞れてまそり、来志  
き梅や秋御うけー門乃内、  
き考や川風ちうまう二階、楚東  
菜の花や馬士は火をうす馬の上、車鏡  
山茶花や僧のちなれふ板、  
約きや豆の清牧乃麦畠、鷺喬  
必炭やしては光る孫と膝、

玄哉雪如梅今年  
梅似雪

去年の雪にまのまこれ梅は  
くいもや日つと戸の透間旭さす、  
花農夫

溜江やいりのまふ春乃水 魯人  
櫓の火や脊まふの昼の山ねし、  
くし山頂やた後毛の竹伐う所 芦中  
雪や何屋ともしまぬ牛格子 免舟



花瓶やそも蝶々の額つき 朱雀不夜樓 吞獅

新樹陰をくぐり涼し中々 文皮

ゆきや中合さず啼 蛙

くまや風はゆるく花も 舞岡

かうけおる藁の枕や朝の月 管鳥

小狐の姿を又まじり 宿也 管鳥

朝鳥やいけく起し旅の宿 管鳥

夜の雪ふつもさ乃あした 管鳥

短衣や下手をたのむれ 碁一 五雲

ちりく屋や月夜の雪乃ま 五雲

借て来て淋しうす 大和 好風

何故月ハおかるそ 後乃 好風

かれくと 涇糸の湧山や 信別 柴雨

霧のおさき 新あらし 古濠



真おし柿の時

松鸞や後乃月人下そよけき

下毛港城 鷹岩

おほろくの物まつくぬ梅の家

武塔西 西羊

山姥のめくもしまるす山さく

同ま物 涼宇

茶乃むよけろふの雲やうぬ山

裁後五分 秋九 疑

虫のくくみ日の月竹叢かそ

き梅やをひるくし雪乃くへ

江戸 蓼太

鯨待くくさひくさよ夕ちより

門 瑟

さくくこ回浪をくれてもら氷

鳥 明

山子破よ茶に一本をのさく

昨 鳥

さくくくひ風情をくそ味暗あつん

カ 麥水

うつくくさるある世なり 萱 妙

半 化

白山や四月乃末にけくまふと

後 川



ふらふやうき一途の花乃申 中 直生  
まらふや己よかこ歌恒牛

。 菫采打て藝進あける清み水 浪花 二柳

。 岁や催市よ今朝より秋の夢 大魯

。 管采よきり居も日あふ家 日 秋の川浮世の人よをささる 日 雲良

。 古川や山あふまらむ言の月 日 八九尺いへり習乃あらし

宿の梅を梅しやと人の見ても宿 春満 云揚

。 色深しそきよりさく桃乃花 はりて 出書改 青蘿

。 難飲は月乃歌さす采花うか

。 老なりし粉烟こころハスえぬうれ 京 蕪村

。 房りて門田もまきくたもつた 京 菫  
。 宛しそあわくはるあり葉か、 儿董  
。 まきく啼園めちよりや花き星



あま馴て根のかさまりしき田くま いせ 入楚

かけろふよ口わぬるハなうりなき せ 梨一

ふゆゆきや雪ももあつて星月夜 詠人 巴人

ふふ乃わうり一おると落にくま、ル圭

ふゆゆき月のすまや大海白、移竹

人さろいらくひ何縁を洗けむ、太祇

古くさき梅の海流や高臺寺、嵐山

かきき江さらハふまかまつは 麻父

一きぬけてあくるし一桃乃とれ 東起

巖折子何を志をもそすろ山 宇大

夏うけてあつてあまの山辺りか

たすすめハ花もくむ山路うれ 一音

かきき江啼や標乃ひなすも 、

花と雲や月のまきとのあつて雲 、

ゆきよいさき雪のえきよいつらなる 、



桜漸く丹まかすも花頂山 日

石の尻長承寺に登て眺望

花登北山うけく夕日ねほ

おほくくの一戸や四方のやまを

逆崩乃麻畑なくやほと羨須

良夜と謝の入海に舟さくく

はーたての高上と月乃さるあや

いつより入りての月の歩とをりて  
旧里のそるうふる成あひ

名月やさくくてちうなひく西

古雄 石巻又はあかりきん  
た〜ハせておのがアアア

もみちのちと花のおむろのこころ

城外四方雪

老ゆ泳々ひとり雪掃く銀閣寺

雪おの園あす休回あ〜

かともくも雪ハをやぬ渡月橋

黒谷もく〜まも雪の叔明く

雪〜く降〜あ〜た

あ〜ゆまや大佛の薨蒔のじ



粟作の幻住庵を在りて  
湖水眺望

去乃和らみ中より又しばらく

日一既

去るやむとりひとりのかゝる山

系子のわたり

がとくと梅さくまると成りたり

嵐山のむの舎浪の惜まれて  
さう山あがり故をり

おぼるにその名を記したる

安永五 申年正月

江戸

須原屋市兵衛

書肆

錢屋七郎兵衛

梅村宗五郎

橋屋治兵衛

井筒屋庄兵衛

板



